

「築城の 苦勞を語る

「残念石」



大阪の観光名所で特別史跡である大阪城は、豊臣秀吉によって天正11年（1583）に築城され、元和元年（1615）の大阪夏の陣によって豊臣家滅亡とともに焼失後、元和6年（1620）徳川幕府により再建されたものです。残念ながら天守閣は寛文5年（1665）の落雷により焼失し、昭和6年（1931）に地元の人々によって復興されたものです。石垣は当時のままで、壮大な城であったことを物語っています。

を切り出していた場所が、大東市龍間地域にも残されており、石切場跡の名称で遺跡として登録されています。石を割るときに楔（矢）を打ち込むために彫られた「矢穴」の残る石や、諸藩の石切場（丁場）を示す刻印のある石が今も残っています。平成2年（1990）の発掘調査では、石切に深く関わっていたとされる在地の有力者足立家を示す石柱も確認されています。

その石垣の石材は、膨大な量を必要としたことから、周辺の六甲山系、生駒山系のほか、遠くは小豆島、岡山県さらに福岡県からも採石されていました。また、秀吉の大阪城の石垣は、現在の大阪城の地下約10メートルに埋没されていますが、そのときの石材も同じような状況で採石されてきたと思われる

一般には、切り出した石材はすべて運ばれて使用されますが、何らかの理由で残されて使用されなかった石材のことを「残念石」と呼んでいます。

現在、中垣内一丁目と東大阪市善根寺町六丁目の市境に、一戸建てほどの巨大な「残念石」が残されています。（生涯学習課）

ます。

徳川幕府による築城は天下普請（各大名に持ち場を与える）で行われたため、諸藩は競って、各地の石切場から石材を切り出しました。それらの石材



中垣内一丁目付近に残る残念石



残念石に残る「矢穴」跡